

☆第256号

2024年9月5日

静岡県地域史研究会報

— 静岡県地域史研究会 —

会告

会則第七条にもとづき、左記の要領にて第四四回総会を開催いたします。会員の方々は、御参会のほどよろしくお願ひいたします。二〇二四年九月五日 会長 小和田哲男

記

一日時 二〇二四年九月二十二日（日、秋分の日）午後二時（記）
一會場 あざれあ男女共同参画センター五階第三会議室

一議事（午後二時～三時）
役員改選
会務報告（会誌報告含む）

（JR静岡駅より西（徒歩八分）

会計監査報告

活動方針
役員改選
会務報告（会誌報告含む）
会計監査報告

年度予算審議

一記念講演（午後三時～午後五時）

「駿府政権と外様大名」

講師 三重大学名誉教授 藤田達生氏

※役員は午後一時半に御集合ください。
※講演終了後、講師の藤田先生を囲んで、懇親会を開きます。

例会報生要旨

四月例会（一二名参加）
四月二十七日（土）
静岡県教育会館 D 会議室
近世三島宿の空間構成とその特徴について 平林研治

本報告は、様々な機能を果たした宿場町に関する理解を深めるため、三島宿を一つの事例として、その都市としての特徴を把握するものです。

今回は、今日の都市史研究の手法を参考に、三島宿の歴史的な流れのなかで①都市を構成する町または複数の町からなる地区に分けて分節構造を把握し、②都市としての特徴を把握することを目標とした。

一 近世三島宿の概要

三島は、中世には三嶋大社の門前町として発展し、定期市が開かれていた。近世には東海道の宿駅に指定され、宿場町として繁栄する。東西に走る東海道に加え、三嶋大社から北へ佐野街道（甲州道）、南に下田街道が伸びる四つ辻のまちであること、東に箱根八里の難所を控え、公私多くの旅行

者が宿泊してにぎわったことが特徴である。久保町、小中島町など約二〇の町で構成され、江戸後期で人口四千人強、高二千六百石余、本陣二軒、脇本陣三軒を数えた。

②寛文期から寛政期への間に、家数が六四七軒から一〇七二軒に大幅に増加した。大きく増加したのは、前出の三町に加え、宿場町周縁部にある新町、二日町、柴町であった。経済的に好立地な三町は間口の分割による増加、周縁部は新規開発による増加と推測した。

三島宿では寛文十三年（一六七三）に検地が行われており、今回はこのうち屋敷地の部を利用した。

① 寛文の検地帳

三島宿では寛文十三年（一六七三）に検地が行われており、今回はこのうち屋敷地の部を利用した。

② 三島宿御案内手帳

本陣を勤めた世古家に伝わるもので、寛政年間作成と推測され、宿場の様々な情報が記されている。

③ 職業入り町並図

天保年間作成と推測され、東海道沿いのみであるが、一軒ごとの職業が記されている。江川文庫所蔵。

三 結果

三つの資料の分析から、いくつかの点を明らかにできた。

① 寛文期、大規模な屋敷地が多いのは、中世に門前町として発展した地区である。また、時代の経過とともに発展が周縁部に広がっていたことがわかる。

島町であった。この地区が経済的にも強かつたと考えられる。
島町では、大規模物流ではなく、旅行者向けの産業が重要であること、農業・製造業などの産業も無視できない要素であることが分かった。
発表に対して、①寛文から寛政の間を示す資料がなく、ここを埋める資料を探すべきであること。
②職業のうち「百姓」をそのまま農業と考えるのは危険ではないか。③寛政期の東海道沿いの平均間口が四間前後であるのは、広いのか狭いのかどう考えるべきか。
などのご意見をいただきたい。①については、多くの記録に埋もれている断片的な資料から街並みを再現できる情報を丹念に探していきたい。②については、一軒ごとに職業が書き込まれているので、農業以外を意味するのということは考えにくいと思っているが、何らかの形で確認したい。③については、他宿の資料確認が必要なため、後日の課題としたい。

近世三島宿では東海道沿いの中心部および中世に門前町として発達した地区が経済的な中心地となっていた。また、時代の経過とともに発展が周縁部に広がっていたことがわかる。

四 まとめ

近世三島宿では東海道沿いの中心部および中世に門前町として発達した地区が経済的な中心地となっていた。また、時代の経過とともに発展が周縁部に広がっていたことがわかる。

六月例会（土）

六月一五日 アクトンティ研修
交流セントラーハイツ会議室
(十九名参加)

室町幕府奉公衆浜名氏の基礎的研究

旅籠や小売り業が多いことか

三ヶ日の室町幕府奉公衆浜名

氏については、江戸期に成立した「浜名記」の記録があるが、これは浜名氏の分流を主張する大屋氏（嫡流は本多平八郎家臣）により作成されたもので、その大屋氏系図とともに信用するに足らない。

高橋佑吉氏は、一九五三年に『浜名史論』を著し、一次史料である古文書・古記録を広く収集・解析して、史実に基づいた浜名氏歴代の事績を明らかにした。しかし前掲の大屋氏系図及び後世の編纂物を併用している。

最近では、三ヶ日町の在史家である村田茂美氏が『浜名神戸』と浜名氏－浜松市北区三ヶ日町の『古代・中世』（私家版、二〇二一年）を、浜名敏夫氏が『鎌倉・小田原・遠江の浜名氏』（私家版、二〇二四年）をそれぞれ刊行しているが、基本的には高橋氏の論説を基軸している。

そこで報告者は、大屋氏記録及び近世の編纂物を排除し、浜名氏歴代の人物比定を再整理してその事績を再説した。

浜名氏は、浜名神戸を名字の地とし、源三位頼政の後胤を自称するが根拠はない。ただ南北朝期からの自称であるらしく、戦国期には仮名を三郎、官途名を兵庫助、受領名を備中守と名乗る。

鎌倉末期から南北朝動乱期の浜名氏の動向は不明であるが、鎌倉を本拠とした一族と、浜名神戸を本貫地とし、京都将軍家に奉公した一族とに分かれたらしい。このためか浜名神戸内の相論に、鎌倉府が関わることがあった。

後者の浜名氏は、將軍義詮・義満期に備中守詮政を出した。詮政は奉公衆として將軍への取次を務める傍ら、歌人としても名を成した。その孫備中守持政入道性育は、連歌の上手として、連歌会の会衆としてしばしば記録に留められている。

応仁・文明の乱時に浜名氏の動

向は不明だが、持政の孫とみられる三郎政明が、將軍義尚の近江親征に従軍している。そののちの明

応の政変を機に政明は、本貫地の浜名郡に下向して在地經營に専念したらしい。

浜名氏は浜名神戸内の有力寺院大福寺を「名字の寺」、摩訶耶寺を「檀那」と文書で表現しているが、永正初期頃の浜名神戸支配は、駿河今川氏から三河田原戸田氏に任されていた。それでも戸田氏撤退後の浜名神戸は、今川氏から浜名氏へ任せたと思しい。しかし浜名一族に対する政明の支

配力は弱く、神戸内には三ヶ日後藤氏や村櫛大沢氏など様々な諸氏の利権が混在している状態であり、浜名氏の影響力は弱かつたとみられる。

政明も父祖と同じく連歌に関する記録はほとんどなく、その大半が和歌や連歌などの文芸活動に関わるものである。在地活動は「大福寺文書」以外に家伝の文書を伝えないので、その実態はなお不明な部分が多く、今後の課題であるとした。

天文初年に政明（入道成繁）が死没したのちは、兵庫助某－三郎某と統いて、三郎の時に家康の遠

江侵攻と、今川氏滅亡を迎える。本坂峠の防御を後藤氏と共に担当したとみられる浜名氏は、引佐峠を超えて直ちに敷知郡から長上郡に侵攻した家康の対抗できず、降伏した。の地元龜二年に、

浜名氏は家康を裏切り、甲斐武田氏に属して浜名神戸を退去した。その後の浜名氏の動向は不明であるが、子孫と思しい家が江戸期の御家人として存続して幕末を迎えている。

浜名氏は奉公衆であるが、軍事的活動を伝える記録はほとんどなく、その大半が和歌や連歌などの文芸活動に関わるものである。在地活動は「大福寺文書」以外に家伝の文書を伝えないので、その実態はなお不明な部分が多く、今後の課題であるとした。

〔例会案内〕

★十月例会

十月十八日（土）午後時～

静岡市歴史博物館講座室（無

料で入れます）

原田千尋著『今川義元』の書

評会

書評者と分担
序論・第一部・第二部

第三部 森田香司氏

第四部・第五部 前田利久氏

司会 小林輝久彦氏 鈴木将典氏

※午後二時開始です。お間違
えのないようにお願いしま
す。

（葉書でお知らせします）

〔事務局からのお願い〕

（一）研究誌の配布について

総会時に研究誌『静岡県地域
史研究』第一四号を配布する予
定です。昨年同様会員の皆様に
は無償で配布します。ただ、一
冊送るのに郵送料が一八〇円か

かります。できるだけ節約した
いので、総会時にお分けしたい
と思います。年一回の総会です
ので、ぜひ多数御参加ください。

なお、会費は本年度から三〇
〇〇円です。

（二）懇親会について

昨年同様懇親会を実施しま
す。講師の藤田達生先生を囲ん
で行いたいと思います。会場は、
アステイ静岡内「しづバル」で
す（会場より徒歩五分、JR静岡
駅内）。午後五時から、一人四
五〇〇円です。

会員の方には申し訳ないので
すが、参加人数を把握したいの
で、懇親会参加希望の方は、事
前に森田まで連絡願います。メ
ールで結構です。できるだけ
十六日までにお願いします。

（三）『東海道中世史研究』1
〔諸国往反の社会史〕・2「領

主層の共生と競合」の御紹介
添付ファイルでちらしを付け
ました。高志書院より上記の本
が岡野友彦氏・大石泰史氏編と
貴田潔氏・湯浅治久氏編で出版
されます。総会当日の販売はあ
りませんが、購入希望の方には、

総会時に大石氏が注文をまとめ
てくれるそうです。定価の一割
引きで送料は一冊三九〇円、二
冊以上は無料になるそうです。

見本は見れるそうです。
会員では、鈴木将典
氏や廣田浩治氏・大
石泰史氏・貴田潔氏
が書かれています。

（四）報告者の募集
について

十二月以降、報告者
が決まっていません
ん。報告を希望される方は、小
和田会長または事務局森田まで
連絡下さい。

静岡県地域史研究会報
第256号
2024年9月5日発行

静岡県地域史研究会
会長 小和田哲男

事務局長 森田香司(090)7023-0733
会計担当 北村 啓(090)4230-6530
〔会費納入先〕
北村啓気付 TE L090-4230-6530
郵便振替口座 00880-3-63062
年会費 3,000円